

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20500512

研究課題名(和文) バスケットボールの競技力を構成する契機としての感性に関する研究

研究課題名(英文) A study on the sensitive composed of the athletic capability in basketball

研究代表者

内山 治樹 (UCHIYAMA HARUKI)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：00168717

研究成果の概要(和文)：本研究は、一回性的で多様な表層でのスポーツ現象を支えて、その生成や構成に根拠を与えている深層での仕組みを「スポーツ構造」(佐藤, 1992)という分析装置を用いて捉えることで、「スポーツ構造がバスケットボールの競技力を規定する」という独自の命題設定から、そのスポーツ構造を構成する、身体性、知性、感性という3つの契機の内、身体性と知性を基礎づけ且つ特徴づけることで最も重要と考えられる感性的契機の究明を行った。

研究成果の概要(英文)：Confusion has arisen in both theory and practice due to vague interpretations of the phrase “athletic capability.” Therefore, in order to find a way out of this situation, this research has the purpose of presenting a framework of thoughts suitable to first grasping the situation, with the premise that acquiring common understanding is indispensable. Paying attention to three points of view, criticism of structural authority, examination of analytical viewpoints and presentation of frameworks, a consideration of conceptual athletic capability using categorical methods is attempted from an analysis/examination of each. As a result, athletic capability is a formation composed of three capabilities, the physical, the intellectual and the sensitive as each dynamics, and it was made clear that the “sports structure” objectified by each ability and that exists at a deep level is a framework of thought suitable for grasping athletic capability. In addition, formulation is also shown from this, in that “athletic capability is provided by a sports structure composed of the three abilities, physical, intellectual and sensitive.”

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学、身体教育学

キーワード：身体運動文化論

1. 研究開始当初の背景

(1) 競技スポーツにおける重要な命題である「高度化」と「専門化」及び「総合的な向上方策」に通底する「競技力」自体の解明は、謂わば「理論知」と「実践知」とが両輪の役割を果たすことではじめて達成できると考えられる。しかし、バスケットボール競技では、その特異な競技力の基盤となる原理論的な研究は、国内外を通して十分に行われてきていないのが実情である。

(2) それ故、このような状況において、バスケットボールにおける競技力の向上を図り、また、そのための方策を構築するためには、その基盤となる「理論知」と「実践知」を併呑する「競技力」の内実を今一度改めて検討し、その深層に潜む諸性質を理論的に演繹する作業は焦眉の急である。

(3) もし全世界に伝播したバスケットボールにおいて、深層の構造を明らかにすることができれば、前論理的な観念論はもとより抽象的な等質時空系の定量的な計測による機械論的要素主義の陥穽に陥ることなく、さらには文化的文脈の差異にも左右されることなく、バスケットボールにおける競技力は共通した認識を獲得できることになるはずである。

(4) 以上のことから、バスケットボールにおける「競技力」の解明にとって、現実に展開する一回性や個別性に特徴づけられる「スポーツ現象」ではなく、身体性、知性、感性という3つの構成契機から成る複合的構成体の深層に伏在し、それを支えて秩序づけている「スポーツ構造」(佐藤, 1992) という

視点からアプローチすることは、多様で一回性的で個別的なスポーツ現象を繰り返し生起させる根拠を考察する上で、重要な意味を持つと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、バスケットボール競技において、一回性的で多様な表層でのスポーツ現象を支えて、その生成や構成に根拠を与えている深層での仕組みを、「スポーツ構造」(佐藤, 1992) という分析装置を用いて捉えることで、「スポーツ構造がバスケットボールの競技力を規定する」という独自の命題設定から、そのスポーツ構造を構成する、身体性、知性、感性という3契機の内、身体性と知性を基礎づけ且つ特徴づけることで最も重要と考えられる感性的契機の究明を目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、上述した目的を達成するために、まず、わが国のみならず、専門術語の解釈において世界に冠たる地位を占めるドイツ、並びにバスケットボール発祥の地であり世界のトップの実力を有するが故に様々な研究成果の蓄積が予想される米国、この3ヶ国3言語でのバスケットボールの専門書、並びに、「構造」や「感性」に言及する様々な学問領域の専門書を渉猟し、バスケットボールの競技力を規定する「スポーツ構造」を構成する上で最も重要な役割を担う美的・倫理的価値観における基準としてシステムを構成する「感性」という契機を通して「競技力」構造の理論化ないし定式化を試みた。次に、様々な異なる競技レベルにおけるゲーム分析を通して、多種多様な「実践知」を実証的に検証した。そして、最終的に、それまでの

理論的研究と実証的研究の両側面から、バスケットボールにおける競技力構造とその深層に伏在する普遍的原理を「感性」という独自の着眼点から究明する、という手順を取った。

具体的には、まず、初年の 2008 年度は、理論的研究として、日・独・米のバスケットボールや構造論や感性に言及する文献を収集し、それらの精読を通じて、「感性的契機」の内実を分類・整理・分析することで概念化あるいは定式化を図った。次に、2 年目の 2009 年度は、1 年目の理論的検討の研究成果を踏まえて、入手可能な各種国際大会（世界選手権大会、オリンピック競技会、アジア大会等）を収録したビデオテープを購入したり、日本国内の高校、大学、実業団の各レベルの公式試合（主に、インターハイ、ウィンターカップ、国民体育大会、全日本学生、日本リーグ等）をビデオカメラに収めることで、それら事例について実証的研究という観点から詳細な分析・検討を行った。最後に、3 年目の 2010 年度は、これまでの理論的研究と実証的研究の成果を踏まえて、バスケットボールの競技力を深層で支える構造において最も重要と考えられる「感性的契機」とその一般的普遍的諸原理について考察した。上にて発表する。

4. 研究成果

本研究では、スポーツ構造を構成する身体的契機と知的契機それぞれの判断基準としてシステムを構成する「感性的契機」の検討が行われたが、それは、身体性と知性を現出せしめている価値観が産み出される背景について考察することでもあった。別言すると、バスケットボール競技において、最終目標である「勝利」を獲得する上で不可欠なプレイ行為の何が正しくて何が正しくないのかを基礎づける美的・倫理的価値観に関与する制

作者を、競技者、チーム、コーチと見做すことで、それぞれの代表者が美的・倫理的対象としてどういう意味を持ち、美的・倫理的にどのような重要性を持っているのか、それに併せて、身体性と知性という可視的な能力とその相互規定性を現出せしめている価値観を抉出する、という問題意識のもとで論究が試みられた。

その際、本研究において「価値に関わる能力」と規定された「感性」は、競技者、チーム、コーチといった制作者の採る行為の是非を決定する美的・倫理的価値に関わるものであり、彼らの価値判断が身体性と知性という両契機の相互規定作用を統御することでバスケットボールは成立し、また、この価値判断によってバスケットボールは特徴づけられることが、他方で、その判断基準は、それを深層で支えて秩序づける規範的原理の存在によって初めて定立可能である、との前提が提示された。

まず、競技者の価値観が、「美徳の化身」と称されたマイケル・ジョーダンを通して検討された。

競技者の美的・倫理的価値は、「自分の才能が活かせるか否か」という判断基準によって初めて自身の身体性と知性が方向づけられ、また、それらの相互作用によって「正しい行為」が決定づけられ、勝利するという目標の実現・達成が保障されることが明らかにされた。加えて、この基準は、チーム内での「自由」を実質的・機能的に支える「積極的に自由を揮う能力の向上に努める競技者」である「自律した強い個」の形成に、その集合体によって真の「チームワーク」の構築に、そして、「チームの団結」を促して「集団的効力感」の醸成に貢献することが確認された。そして、最終的に、自己創造と自己のアイデンティティの形成、という命題のもとで

の享受すべき「積極的自由」とは、「自由」を抽象的に定義してチームとして制度的に保証することなどではなく、チーム内で競技者自身の正しい行為を可能にする上で不可欠な「自分の才能を活かせるか否か」という基準を統御し得る規範的原理であることが明らかにされた。

次に、チームについて検討が試みられた。ここでは、チームにおける戦い方の是非が、「勝つものは美しい」という同一の価値体系のもと、原型の首尾一貫した変形として、特定の時代や文化圏を象徴する価値体系に支えられた集団的な身体技法である「ゲーム・スタイル」を通して考察された。

考察の結果、史上最強チームであったシカゴ・ブルズのような強いチームに共通するのは、「ゲームパフォーマンスの向上が図れるか否か」と「選手個人を満足させられるか否か」という2つの判断基準であることが抉出された。しかしながら、チームにおけるその2つの基準を通じて、個々の競技者の「積極的自由」を擁護し、「自分の才能を活かせるか否か」という判断基準を統御するのは、勝利するという目標を達成する上での公正な条件をなす「協働」という規範的原理が存在してこそであることも明らかにされた。

最後に、コーチについて検討が試みられた。その際、現代において最も「有能なコーチ」と見做されるフィル・ジャクソンを分析対象とした。

まず、コーチの役割は、「可能態→現実態→可能態’→・・・」という競技力向上のメカニズムを起動させ力動化するために、「運動文化→身体能力→運動文化’→・・・」というサイクルから成るコーチングの過程において「効果的な触媒」として機能することで、当該種目に特異な条件下での「非運動性」といった拘束から常に脱却させようとする

「力づくの強制」の行使に存することが確認された。また、その過程は、競技者1人ひとりの「積極的自由」を尊重して個の集合体としてのチームの最大の利点である「協働」をフルに発揮せしめ、「無私と思いやり」を併呑した「力づくの強制」によって、競技者の能力を最大限に引き出すことであることも指摘された。そして、「協働」という「原理」は、「格差と効率のバランスが図られるか否か」という判断基準によって、最終的に、ジャクソンが「中間に行く」と言明し、ジョーダンをして「中庸的アプローチ」と形容された「互惠性」に収斂されることが、他方で、それは、「格差と効率のバランス設計」を担う「スマート・パワー」という「力づくの強制」に潜在する規範的原理であることも明らかにされた。

このように、本研究では、バスケットボールにおける複雑多様な動きと、それをどのように解釈して選択し組み合わせたら勝利することができるのか、という問題に関わる専門知識としての能力である「感性」は、その解決のための知性あるいは指導技術を有する制作者の美的・倫理的価値観に左右される一方で、そこには共通する判断基準とそれを深層で支えて秩序づける規範的原理があるはず、という前提のもと、バスケットボールの競技力を規定するスポーツ構造における身体的契機と知的契機が感性的契機に方向づけられている事態が、競技者、チーム、コーチを代表する事例の分析を通して明らかにされた。また併せて、感性は、複合的構成体としてのバスケットボールの競技力において最も重要な契機として機能していることが明らかにされた。

総じて、競技者、チーム、コーチという制作者それぞれに内在する価値観の共通に妥当する判断基準とそれを深層で支えて秩序

づけている規範的原理と、それら制作者同士の双方向の意味システムの連続的な生成の過程が明示されたことは、身体性と知性という競技力を構成する2つの能力及びその相互作用が勝利を実現・達成するために最も重要な専門知識としての能力である感性を契機として浮上せしめることになるといえる。その一方で、感性的契機によって初めて、身体的契機と知的契機が果たすべき役割と機能についての内実や方向性が規定されるという、「スポーツ構造」を構成する3契機の「有機的に関連し合う関係のネットワーク（システム）として成立している」こと、すなわち、競技力が存在する、そのメカニズムが明らかになったといえる。

他方で、本研究は、理論知と実践知の構造連関に光を当てることになるがために、バスケットボール研究における新たなパラダイムの構築、という位置づけを自ずと有することになる点に意義があったといえる。また、本研究の成果は、トップレベルにおける競技力の向上にとって、その土台を基礎づけることになる理論知を獲得することになるばかりか、その対象は初心者にまで及ぶため、学校教育における教師や地域の指導者に対し、実際の指導場面に不可欠な実践知としての貴重な示唆を与え得る点にも特徴があるといえる。加えて、この意味において、本研究は、あらゆるレベルの競技力の実態を踏まえることで、そこでの要望に応じたトレーニングプログラムを作成する上での基礎研究としての位置づけを自ずと有することにもなるといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 内山治樹、バスケットボールの競技特性に関する一考察、体育学研究、査読有り、54巻、2009、pp.29-41。
- ② 内山治樹、競技力の概念的把握への方法序説、体育学研究、査読有り、54巻、2009、

pp.161-181。

- ③ 高橋朋子・藤井範久・内山治樹・小山宏之・武田 理、技能水準の異なるバスケットボール選手のロングチェストパスにおける下肢および体幹動作に関する研究、スポーツ方法学研究、査読有り、22巻第1号、2009、pp.1-12。
- ④ Murata, K. Ae, M. Uchiyama, H. and Fujii, N.: A biomechanical method to quantify motion deviation in the evaluation of sports techniques using the example of a basketball set shot. Bulletin of Insutitute of Health and Sport sciences, University of Tsukuba, 査読有り、31, 2008, pp.91-99.
- ⑤ 皆川孝昭・内山治樹・吉田健司、バスケットボール競技の「トランジション」におけるチーム戦術に関する一考察：空間に着目した攻撃の優先順位について、スポーツ方法学研究、21巻第1号、2008、pp.17-27。(平成20年度日本スポーツ方法学会奨励賞受賞)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内山 治樹 (Uchiyama Haruki)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授

研究者番号：00168717